

幼稚園の教育

Nursery-Kindergarten Education
Ed. Jerome E. Leavitt
Mcgraw-Hill Book Co. Inc. N. Y. 1958

第九章は、「遊びと身体的活動を指導すること」についてかかれている。先ず最初「幼児における身体的な発達」として、発達の型についての一般的な概念が、かなりの紙数を費やして説明されているが、これは現

場の教師のよい参考にならう。なぜなら、指導の目的が結局は集団のなかの個々の子ども、適切な発達を促すことにあるとしても、最初のプランは、やはり集団の一般的な性質に基づいて立てられることになるからである。

次に「ナースリー・スクールと幼稚園の経験」について、「健康的な環境を用意すること」「身体的活動のプログラムをたてること」「適切な設備を用意すること」「身体的な活動を楽しむ態度を発達させること」とくわしくのべられている。「遊んでいる子ども」では短い説明のなかに、遊んでいる子どもの姿を巧みに描き出している。最後に「二才から六才までの子どものための活動」を「自由あそび」、「リズム活動とダンス」、「模倣活動」「組織的なゲームと妙技」の四つの型にわけ、具体的に説明していることは、現場の教師にとって最も興味のあるところであろう。

次に、紙数の許すかぎり、その内容について紹介してみよう。

最初の、「幼児における身体的な発達」については、二才から六才まで、年令を追って発達の特徴が説明されている。そのなかで、

各年令を通じて絶えず強調されていることは、大小の筋肉の発達と、その発達のために必要な運動を促す玩具や、設備が与えられなければならないということである。例えば、二才児では、筋肉、特に足の筋肉が非常に成長発達するので、その発達に必要な運動を促す玩具や設備が与えられなければならないし、三才児では、細かい筋肉の使い方が次第に上手になってくるので、バズルのように手先で扱う材料が必要になると同時に、大きい筋肉の運動も大切なので、よじのぼったり、押したり、投げつけたりするための道具が必要である。この大小の筋肉を使わせる設備や、道具や、場所の必要は、四才、五才、六才を通じてのべられているが、六才では特に、小さい筋肉を使うことの巧さを増す一連の活動——切ること、色をぬること、粘土をこねること、絵をかくこと、バズルをする——の必要さがあげられている。以上に加えて、身体的な発達のみに限らず、情緒や、社会的適応の発達の面にまでふれていることは、この「発達」についての説明の部分を一層重要なものになっている。例をあげてみよ

う。二才児は社会性がめぎめてくるので、同年令の子どもの近くで遊ぶ機会をもち、グループのなかで楽しい経験をもつことが必要であり、三才児は友だちを求め、また家庭生活の劇化がすきであるから、おうちごっこのための玩具と、友だちとが与えられねばならない。また三才児は感情の抑制ができはじめ、社会関係は練習の機会が多く与えられるほどよくなっていくので、問題の解決を助けたり、他の子どもたちとの遊びを励ましたりすることが必要である。四才児は他の子どもたちとの親交を求め、非常に簡単なルールのある二、三のゲームができるようになるし、活動を計画したり、他の一人二人の子どもを誘うことが出来るようになるが、友だちの提案をうけ入れたがらないし、道具をわけるとや、交代することを学びつつある途上なので、おとなの示唆や忍耐強い指導が必要である。五才児は社会的発達が長足の進歩をしつつあるので、長く一つの場所に閉じこめず、彼らのプランやルールを協同してつくるように多くの機会を用意し、また、遊びや、協力や、設備を分けあうことについての彼ら

自身の問題を解決するために指導が必要であり、六才児は長期間一しょに遊べるグループをつくれるようになるし、争いの解決はことが多くなり、怒らずに友だちの批評をきくことができるようになる。またいろいろなゲームを好み、しようとするが、本当のゲームは組織されない。……以上のような発達の輪郭は、指導のプログラムをたてる上によい参考となる。

「ナースリー・スクールと幼稚園の経験」では先ず「健康的な環境を用意すること」の重要性があげられている。ナースリー・スクールや幼稚園は、子どもたちの年令水準に最も適した身体発達に子どもを促す重要な責任があり、健康な生活や遊びと身体的活動のプログラムは、切り離して論ずることができないからである。ここでは、健康的な環境をつくるための基礎的な用意や、健康習慣があげられ、また遊び場の安全性に十分考慮を払う必要が説かれている。次に「身体活動のプログラムをたてること」のなかでは、子どものための活動の総合的プログラムの、欠くことのできない一部分として、クラスに適した活動

の型の横断面を計画すべきことが言われている。最年少者は大きい筋肉を使う活動を必要とし、リズムにはあまりあわせられない。最年長者はリズムミカルな行進や、歌あそびや、フォークダンスを喜ぶ。身体活動の時間や位置やなにを強調するかは、グループの成熟度にしたがって異ならなければならない。「適切な設備を用意すること」のなかでは、よじのぼったり這ったり、ころがったり、ペダルをふんだり、その他いろいろの運動をするためのいろいろな道具や設備のリストをあげて、それらを効果的に使える年令を示している。例えば這うための大小のたるは二才から五才、ころがるための芝生は二才から六才までに向いているというふうである。くわしくは原書を参照されたい。「身体的な活動を楽しむ態度を発達させること」では、play spiritを育てなければならぬことが強調され、それを完成する方法として一から十四まで簡条がききあげられている。これらすべてをあげることはできないので二・三の例をあげると○最少限に遊びのルールを保ち、常に活動の安全性を考慮すること。幼児は少しのルールし

か覚えられないし、それらのすべては彼らに良識をつくる。○子どもの活動に干渉することを避けること、そして遊びの活動がうまくいっているように思われないうちだけ示唆すること。○年上の子どもたちに、よいスポーツマンシップの初歩の概念を教えること。などで、さすがは民主主義的な教育理念をもつ国と思わせるものがある。

「遊んでいる子ども」では、遊んでいる子どもの姿を具体的にえがいているが、このなかで、子どもは彼の遊びの経験を通して、彼が生きている世界について学び、そこにすむいろいろな人々と如何に折り合っていくかを学ぶということ、遊びは子どもの全面的な発達にとつて欠くべからざるものであること、このなかで教師は play spirit を育てなければならぬが、また彼の真剣さに真実の評価をしなければならぬことを主張している。「二才から六才までの子どものための活動」では、おもしろくもあり、運動にもなり、遊びの経験を与え、子どもの社会的情緒的成長にも貢献するような活動を四つのタイプにわけて説明している。すなわち「屋内や戸外の

設備を用いた自由な、しかし監督された遊び」「リズム活動とダンス」「模倣活動」「簡単なグループ・ゲームと妙技」である。この中で、生活の最も大きな部分を占めるものは最初の「自由遊び」であろう。子どもたちは、初めにいろいろな備えつけられた設備を紹介されなければならないし、年令がすすむにつれて、個人やグループが必要とし、レディネスを示した時、新しい設備や玩具や活動が紹介されなければならない。「自由あそび」は決して教師の側の受動性を意味しない。教師は、子どもが必要とした時に助けられるように用意していなければならないし、子どもたちを種々の活動に参加するように勇気づけ、遊びのプログラムのバランスをとるように考慮しなければならない。以上が「自由遊び」における主張である。「リズム活動とダンス」においては、身体反応の場合も、リズム楽器を扱う場合も、先ず個々の子どもの彼自身のリズムをいう意識を発達させてのちのみ、他の子どもや、教師のピアノや、レコードのオーケストラによるリズムにあわせようとする事ができる。ことを強調

している。すなわち、小さい子どもたちは殆ど全部、音楽をきいたり、それに反応することを好むけれども、二才児のはそれにあわせることができず、歩いたり、ダンスをしたり、とびはねたりする時、彼ら自身のリズムをきめるから、教師は個人のリズム活動を勇気づけなければならない。いくらかの三才児は、 $\frac{2}{4}$ や $\frac{4}{4}$ 拍子にあわせることができ始め、四才では殆どそのテクニクを修得する。四才児にとり入れられるリズム楽器も、身体反応と同様に、最初に子どもたちに受験させたり、個々のリズムでさせることがよいとしている。四才児はまた、音楽に役わりをつくり出すことや、すべったり、まわったり、腕を曲げたり、優美に動かしたりしてダンスをつくることを喜ぶが、五・六才児では、劇的な役や事がらを喜ぶだけでなく、音楽的なムードの中にとけこむ——インディアンのような足は、追われるものと追うものという体の姿勢や、顔の表情を伴い、激しい調子と低音を強調した音楽は大男や象を示唆することができ。このように、五・六才児が音楽に反応するたくさんの種類の経験をもっていれば、よく

知らない音楽でも自分の解釈に基づいて演出するようになる」と説明されていることは、創作的なリズム活動の指導としてたいへん興味深いところである。また、六才児は、基礎的なリズムに基づいた、すなわち、走ることにスキップ、または、円で歩いて立って拍手するといような二つの部分しかもたない簡単なダンスを喜ぶが、複雑なダンス・ステップや、ダンスの型で、ナースリー・スクールや幼稚園の子どもを訓練することは決して好ましいこととでなく、完成よりもグループ経験における喜びが目的であることを力説している点は、見落してはならないところであろう。「模倣活動」のなかであげられているリストは、ポルト漕ぎ、人形あるき、花つみなど、ほとんど日本でもなされているものであるが、これは、どんな道具や設備も使わずに、体の動作でなされるものようである。これらの断片的な模倣活動を物語のような順序で集めたものを story play と呼び、五・六才児が特に喜ぶグループ活動としてあげているが、筋が簡単で、子どもたちの経験と関係があつて、大きい筋肉の活動のためになるものである必

要が、具体的に例をあげて説明されている。「組織的なゲームと妙技」では、五才以前ではグループゲームに殆ど興味が無いが、子どもが略式のグループ・プレイに興味をもつようになる、無理のない時間のくぎりをもつたことをして遊べるようになった時、非常に簡単に、小グループの協同を必要とするようなゲームをすることができると説明され、例えば、五才児向では宝さがし、六才児向ではハンカチおとしのようなものがあげられている。チーム精神とチームとして遊ぶ能力は、幼稚園を去つてずつとのちに発達するもので、これらの初歩的なゲームの競争的な要素は一般に個人的なものに限られるのとべられていることも心にとめておくべきことであらう。最後に、すべての身体活動はナースリー・スクールと幼稚園の総合的なプログラムとの関係において考慮されるべき必要があると結んでいる。

(お茶の水女子大学付属幼稚園 守永英子)

訂正 2月号14頁下段17行目の「軍隊ごっこ」は楽隊ごっここの誤りにつき訂正します

幼児の教育 第五十九巻 第四号

四月号 ◎ 定価 五十円

昭和三十五年三月二十五日印刷

昭和三十五年四月 一日発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。